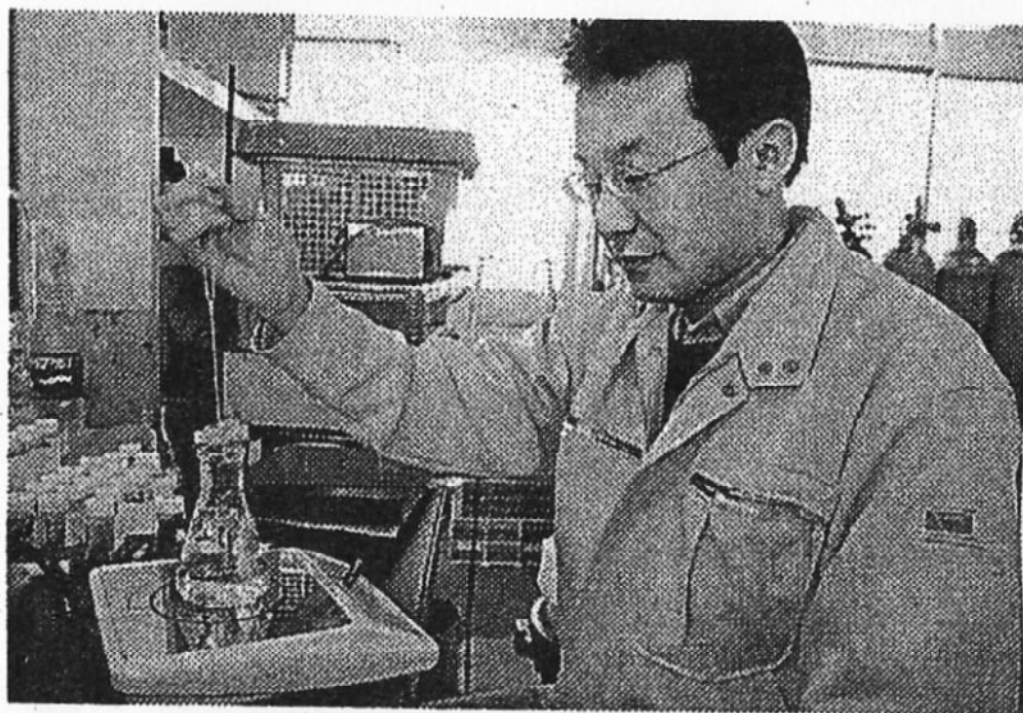


研究の現場から

文字が消える紙を開発

高知大の
市浦助教 08年度の商品化を目指す

高知大農学部（南国市）の市浦英明助教（32）は、自然に文字が消える機能を備えた紙の研究を進めている。個人情報情報の消去が出来るなど多機能を持った紙づくりが期



文字が消えるなど特殊な紙づくりに
取り組む市浦助教

待されている。

消したい文字の上に、硫酸鉄やタンニン酸を閉じ込めたマイクロカプセルを置く。発色する成分を持っており、温度や湿度に反応し、一定時間後に溶けだして文字を消す仕組み。04年度から研究を進め、カプセルを約1ミリの大きさまで縮小させたが、実用化の際はさらに小型化を図る。

マイクロカプセルを紙に付着させるには、水と油が混ざらない性質を利用。油成分を含む溶液を紙に浸透させ、その上にカプセルを置くと、水の層と油の層がカプセルを挟み込み、定着するという。

市浦助教は前任地の愛媛県紙産業研究センターで地元企業と開発を進めてきた。08年度の商品化を目指しており、高知県内の企業とも研究に取り組む考え。市浦助教は「マイクロカプセルの中に医薬品や農薬を詰め、周囲の環境に反応して、自然に放出する紙も開発したい」と意欲を見せる。